別紙様式３（第３条関係）

論　文　要　旨

氏　名　　石　亮亮

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

清代章回小説《醒世姻縁傳》における逆序語に関する研究

論文要旨

問題の所在と範囲

以下の例文①と例文②を見る。

①寄姐道:‥。聽見説給他衣裳穿,給他飯吃,我就生氣。見他凍餓着,我纔喜歡。(醒世80.1b.9)－「嬉しい」

②巳<=已>將日落時節,素姐惱巴巴不曾吃飯。寄姐因攛掇不聽,也就不大歡喜。(醒世95.11a.5)－「嬉しい」

現代共通語の会話で喜ぶ気持ちを表現する時に“開心”、“高興”を口頭語で使用し、一般に“歡喜”はあまり使用しない。“喜歡”も用いられない。“喜歡”は“喜愛”の意味を表すためである。しかしながら、清代章回小説《醒世姻縁傳》(略称《醒世》。以下は同じ)では“喜歓”は“高興”の意味を表し、そして、口語色が強いため日常的な生活の中で喜ぶ気持ちを表現する時、一般に使用されるが(34 箇所、例①参照)、地の文なら“歓喜”を使うのが普通である(38 箇所、例②参照)。“喜歓”と“歓喜”は現代共通語では意味が違うが、当時では同じ意味があった。

“喜歡”“歓喜”は字順の逆転する二字漢語である。これを逆序語という。同じ意味があっても、使用状況には差異がある。そこで疑問が出る。当時は“喜歡”“歡喜”は一体どのような特徴をもっていたか、また現代漢語にどのように継承されたかという問題に興味を持つようになった。明清時代はこのような語彙現象が一般的である。以下の“常時”“時常”は同様である。

③常時但是合他合合氣,他本人倒還没怎麼的。(醒世 64.10b.10)－“平日;往常”

④後來寶玉明白了,舊病復發,常時哭想,並非忘情負義之徒。(紅樓 113.12b.8)－“經常”

⑤宋江公事之暇,時常出郭遊玩。原來楚州南門外,有個去處,地名喚做蓼兒。(水滸100.71b.1)－“經常”

⑥及至到了門首,愧心復萌,想道:時常挑了擔子在他家賣油,今日忽地去做嫖客,如何開口。

(《恒言》)-“平日;往常”

例文③～⑥のように、明清時代は“常時”“時常”が一般的に用いられている。しかし、現代語になると、“常時”はあまり見られない。“時常”は“經常”の意味だけ継承された。一方、“常時”は南方方言に継承されている。

中国語の歴史は非常に長い。古代中国語から、中世·近世を経て現代中国語へと変遷する。ちょっと見るだけでは、語彙の変化がないが、緻密に考察すれば、変化の跡が存在する。“常時”と“時常”のように、上古、中古語“常”と“時”を受け、現代共通語“時常”へ変遷してきた。要するに、“常時”、“時常”は互いに発展、衰退、消滅の過程を経ている。“常時”、“時常”のような逆序現象は中国語の単音節語から複音節への産物である。“又復”“復又”は同じように語彙の変遷を経た。“又復”“復又”は古代の単音節言語(“又”“復”)→明清時代の単音節言語と二音節言語の並存(“又”“復”“又復”“復又”)→現代の単音節言語(“又”)へと変化する。

《醒世》にはこのような字順逆転語の組み合わせが数多く存在し、166 組の逆序語を検出した(片方のみ出現するのは別に 36 個存在する)。本論文は、当時の逆序語の全使用状況や語彙の各自の特徴などに焦点を当て現代漢語と比較し、旧白話小説の語彙が現代漢語の中にどのように継承されているかを究明し、語彙の意味の発展、衰退、消滅の実態を明らかにする。

なぜ《醒世》にしなければならなかったのか。その理由としては、古代中国語から中世中国語、近世中国語を経て現代中国語への流れの中で、現代漢語の直接の祖先は近世語であるが、近世漢語の中の《醒世》は清代初期の北方中国語を反映した貴重な白話資料である。明代中期《金瓶》を受け、清代中期《紅樓》へと受け継がれてゆく中国語の歴史の中で非常に重要な地位を占めている(明代中期《金瓶》から清代中期《紅樓》への過渡期的役割を果たすもの)。なお、《醒世》は姻家を切り口にして、巨大な下層階級の市井の生活や暮らしを記述し、前世と今世とに渡る因縁因果を描き、全100回に及び、約100万字を擁する大部章回小説である。使用する言語の基礎方言から、作者不詳であるものの山東省の人だと判る。長編で且つ様々な階層の人物が登場し、当時の口語を反映した語彙が非常に豊富である。役所官吏、地主幕僚、店の伙計、神仙、道士、僧侶、尼姑、小間使い、芝居芸者、娼婦、媒人、仲介婆、乳母、産婆、塾の先生、生徒、家庭教師、料理人、商売人、職人、農民、こじき、泥棒などの各階級の人々の生活光景を描く。

発見と構成

新しい知見といえば、まず、《醒世》中の逆序語を摘出した結果、166 組存在する。所謂 AB 型と BA 型であり、片方のみ出現の BA 型は 36 個である。166 組を考察する上で、品詞上から動詞が最も多く見られ、79 組である。名詞は 53 組、副詞は 17 組、形容詞は 15 組、代詞と接続詞は各 1 組である。また、166 組の逆序語は現代漢語に多く残存・継承され、継承されないのは 12 組である。しかも、一番の成果としては語彙の変遷と当時の使用特徴が見られる。例えば、明清白話では“脱剝”“剝脱”が《醒世》だけには検出された。そして、

“剝脫”は他動的、強制的に他から何らかの作用を受けることである。一方、“脫剝”は何らかの行為を強制される場合もあり、自主的に自ら行動をすることもある。

本稿は、大きく五つの部分に分けられる。第一章は研究動機、研究目的と意義、先行研究、本稿の立場、研究方法であり、第二章は、独創的な部分、新しい知見、《醒世》における逆序語の出現状況と各逆序語組の比較(現代漢語との比較を含む)であり、第三章は事例研究であり、第四章は逆序現象の形成要因であり、第五章は結語である。

各部の概要は次の通りである。

第一章は、なぜ《醒世》にしなければならなかったのかとなぜ逆序語を取り上げねばならなかったのかの理由を出し、研究動機を明らかにする。次にこの研究をもって近世漢語の研究及び言語の歴史的変遷を把握し、文献整理、辞書編纂、言語教育などに役立てるようにすることの研究意義、《醒世》の不十分な研究の現状と緻密な研究方法を提出する。

第二章は《醒世》における逆序語を中国語では、①どちらか一方が継承されているもの、②どちらも継承されているもの、③どちらか一方が方言に残っているもの、④どちらも消失したものという四種類に分けて一語ずつ分析した。更に、“房門”(とびら)－“門房”(門番小屋)のような意味が完全に違う語彙組を考察した。

第三章は、《醒世》から当時の言語の特徴を反映する 10 個の典型例を抽出し、語彙の全使用状況や各自の特徴などに焦点を当て現代漢語と比較し、現代漢語の中にどのように継承されているかを究明し、とくに明清時代から現代中国語までの語彙の変遷を中心に考察する。考察結果は以下の通りである。

①“常時”について

《醒世》の“常時”の形成過程、意味変遷及び語用機能:

ⅰ“常”と“時”は各自基本義と派生した意味をもつため、複合した二音節語“常時”にも“經常”の意味と“平日;往常”の意味が含まれていると考えられる。

ⅱ明清時代では主導となる意味は基本義で“平日;往常”になり、通用語として南方でも北方でも使用され、清代中期以後、南方方言に使用される傾向にある。一方、“常時”の“經常”の意味の出現は基本義より遅く、北方でも南方でも使用されるが、量的には多くないので、当時共通語とはっきりと判断できない。ただ、“常時”の“經常”の意味は清代後期では南方で使用されていることがよくある。

ⅲ当時の類義語との比較を通し、《醒世》の“常時”は時間詞として会話文に用いられ、現在時点との対比を強調する。

ⅳ“常時”の出現は“時常”より早い。意味上では “常時”の名詞“平日;往常”の意味の出現は“時常”より早い。しかし、“常時”の副詞“經常”の意味は“時常”より遅い。

ⅴ“時常”は明清時代で通用語として南方でも北方でも使用され、現在漢語とはあまり変わらない。語義の分布では、“時常”は副詞“經常”の意味の使用は一般的であるが、“平日;往常”の意味の使用は少なく、現代漢語にもあまり使用されない。

②“情管”と“管情”について

現代方言と《醒世》の“情管”の機能と各自の特徴:

ⅰ《醒世》の“情管”の特徴は前後文脈が相手を勧誘する場合によく用いられ、口語的で語気副詞として確実性を表すことである。

ⅱ近世語と現代方言の“情管”の意味は変わったが、機能はあまり変わらず、つまり両方が前後文脈が相手を勧誘する場合に用いられ、相手を“思維上的誘導”することもでき、“行為上的誘導”することもできるという機能が同じと思われる。そして、“情管”は確実性を表すが、“情管”を用い、その確実性を強調することで、自分の意志通りにやってもらうという勧誘語気がさらに強まるという点も同じだと思われる。

ⅳ連雲港市贛榆県の方言には“情管”は副詞として“儘管”(「思う存分にする」)の“勸勉”(「励ます」)のニュアンスを表す他に、“一直、總是、老是”(「いつも」)の“勸誡”(「戒める」)のニュアンスも表す。つまり、贛榆方言の“情管”の使用範囲が更に広いことが分かる。この点は“情管”の使用状況について新たな補充になるだろう。

ⅲ“管情”“情管”は明末清初から清代中期まで使用されるが、清の後期になると、徐々に用いられなくなる。

《醒世》の“情管”と《金瓶》の“管情”の相互交替の要因:

ⅰ構成上から《醒世》の“情管”と《金瓶》の“管情”の特徴:“管情”の主語は第一人称または第二人称の場合なら、“我”“你”は一般的に省略される。一方、“情管”は文頭に置かれ、“我”“你”は省略せず、肯定の語気が強まると考えられる。なお、「“情管”+“是”」の構造は当時は一般的な表現であるが、「“管情”+“是”」の構造は見えない。

ⅱ《金瓶》の“管情”と《醒世》の“情管”は後ろにくる語彙の褒義と貶義に差異がある。“管情”の後ろに一般に肯定的、積極的な意義を表す語彙が来る。一方、“情管”の後ろに一般に消極的な意義を表す語彙が来る。

ⅲ近世語には“情”の使用が活発で新しい意味項目が出て、使用範囲も広くなる。特に副詞として使用されることが多い。これは“管情”“情管”が逆序現象になる一つ原因だと思われる。

ⅳ“情”と“管”の意味が同じため、“管情”と“情管”が聯合式二音節逆序語となり、聯合式二音節複合語は用語の語序は逆になりやすく、歴史の流れで、《醒世》の時代に“情”の意味項目や使用範囲などが広くなり、より進んだ段階になり、複音節を形成するとき、“情”が作る複合語は、不安定性があるため、“管情”と“情管”の相互交替になり、逆序現象が生まれる。

③“齊整”と“整齊”について

明清時代の“齊整”と“整齊”の違いと現代漢語への継承:

ⅰ明清時代の変遷について、明清全体的に見れば、“齊整”の使用頻度は“整齊”より比較的に高く、明清時代の“強勢詞”である。しかし、言葉の発展で清代中期以後は“齊整”の使用頻度が低くなり、“整齊”のようになりつつある。清代中期以後“齊整”は既に明の中期から清代初期の一般的地位を失ってしまう。一方、“整齊”は明清時代にあまり使

用されないが、民国から多く用いられるようになる。
ⅱ品詞、意味上で明清時代の“齊整”は形容詞の副詞化「きちんとした」の意味もあり、「美しい、綺麗である」の意味の場合、多く使用するも「人の容貌」に限定していない、物も修飾する。一方、明清時代の“整齊”は普通に形容詞で述語として使用されるが動詞の使い方もある。この点は“齊整”と違う。
ⅲ会話文と地の文から明清時代の“齊整”の口語色は“整齊”より強く、当時は基本的に日常生活の会話で用いられ、通俗的、分かりやすい言葉と考えられる。一方、“整齊”は会話文の使用状況としてはあまり多くない。
ⅳ現代方言への継承について、“齊整”は方言で、「美しい、綺麗である」を表し、南方、北方の一部では依然として使用されている。これは明清時代“齊整”は南方でも北方でも「美しい、綺麗である」の意味を使用していたことを反映する。一方、“整齊”は方言で、「美しい、綺麗である」を表し、粵語(廣東陽江)、閩語(福建壽寧)の地域に依然として使用されている。ただ南方の地域だけである。これも明清時期の“整齊”の「美しい、綺麗である」の使用はただ南方にあるという特徴を反映する。
ⅴ文の置く位置について、明清時代の“齊整”は「動詞+名詞+齊整」、「齊整+動詞+名詞」と「動詞+齊整+名詞」の構造はあり、置く位置を変えても語義はあまり変わらない。補語の場合、「動詞+名詞+齊整」構造は特徴である。同じ時代の“整齊”はこのような用法はあまりない。また、現代漢語でもあまり使わない。“齊整”は置く位置の多様性は明清時代では“整齊”より活発的であることがわかるだろう。

④“照依”について

《醒世》の“照依”の特徴と現代漢語への継承:

ⅰ介詞の“照依”は明代から清代の中期まで北方にも南方にも共通語として使用されている。当時の“照依”は日常生活に話し言葉として使用されるのが普通である。この点は現代標準語の“依照”と異なる。現代の“依照”は普通に書き言葉として使われる。そして、“照依”は清代の末期になるとあまり使われなくなることがわかる。
ⅱ“依照”の使用状況については、“依照”は明清時代にはあまり使われない。民国初期から徐々に現れてくるが、使い方は現代標準語の“依照”とあまり変わらない。
ⅲ準拠を表す介詞の“照依”の“照”を研究すると、現代日常生活では“我是照你的話做的”の言い方が常にあるが、即ち「“照”＋修飾部分＋規定、習俗、文件、話語などの言葉」の構造が常にあるが、当時では“照依”は“照”とある程度取り替わって、この構造を使用している。中国語は古代の単音節言語から現代の二音節言語へと変化してきたが、“照依”は会話文では上古、中古時代の単音節言語(“照”)→明清時代の二音節言語(“照依”)→現代の単音節言語(“照”)へと変化する。

⑤“喜歓”と“歓喜”について

《醒世》の“喜歡”“歡喜”の特徴と現代漢語へと変遷:

ⅰ《醒世》では日常会話文に喜ぶ気持ちを表現する時一般に“喜歡”を使用する。一方、

“歡喜”は多く地の文に用いられる。語義機能、組み合わせ能力、文の構成上では、“喜歡”の方が一般的で使用範囲がさらに広かったと考えられる。

ⅱ清代では“喜歡”の動詞と形容詞の用法は北方でも南方でも用いられ、時間の流れによって、動詞の用法は一般的になって、形容詞の用法は現代南北方言に継承される。一方、“歡喜”の動詞“喜愛”の意味は北方では使用されず、南方では引き続き使用される。

ⅲ当時は動詞“喜愛”の意味を表現する時に“喜”と“中意”の二語が多く用いられている。

⑥“何如”と“如何”について

《醒世》の“何如”と“如何”の特徴:

ⅰ《醒世》で単独で使用される“何如”の語用機能としては、文脈により、断定を強調するために、言いたいことと反対の内容を疑問の形で述べ、「あなたは間違っている。私の考えを認めておくれ。」と注意を与え、相手に不満や責める気持ちを表すことだと考えられる。全用例 7 箇所は全部このような使い方である。これが《醒世》の“何如”の特徴だと思われる。明清白話小説にはこのような用法は見られない。

ⅱ“怎么办”を表すのは《醒世》だけにある。これは現代共通語と異なっている。これも《白话》の“何如”に対して新たな意味の補充になると思われる。

ⅲ“何如”と“如何”は《醒世》時代には口語色が強く、基本的に話し言葉として使用されたと考えられる。これは現代共通語の“何如”や“如何”と異なっている。

ⅳなぜ“何如”が基本的に文末に置かれるのかは“何”は元々一般に文末に置き述語として“怎么样;什么”の意味で使用されたため、中心語“何”が作った“何如”も文末に置かれ、述語として“怎么样;什么”の意味を表すようになったと考えられる。

⑦“尋找”、“找尋”について

《醒世》の“尋”、“找”、“尋找”、“找尋”の特徴:

ⅰ《醒世》では“尋”は一般的で圧倒的に使用され、構造上も意味上もよく使われる。

ⅱ“找”、“尋找”、“找尋”の目的語が抽象的ものの用例は未検出であるが、“尋”は具体的ものもでき、抽象的ものもできる。これは現代共通語と異なっている。また、“尋”の後ろについた可能補語の構造は当時は一般であった。

ⅲ“尋找”は《醒世》の時代まだ新しい語彙であった。“尋找”は自動詞としてしか使用されないのは“尋找”があまり発展していないことの反映である。

⑧“要緊”について

ⅰ《醒世》の“要緊”は“緊要”“(得)緊”“緊着”との比較を通して、“要緊”は使用範囲はさらに広いと考えられる。

ⅱ“要緊”は一般に「大切である」の意味を用いるが、「(程度が)激しい」、「緊急を要する」の意味にも用いられる。また、ことの緊急性を言う用例もある。なお、“要緊”の後ろには「事」だけではなく、「人」も用いることができる。

ⅲ“沒要緊”は多く非難や不満、不服、苦情の文脈に用いられる。清代では一般に北方に用

いられ、清代中後期になると用例が少なくなる。その代わりに“不要緊”という語が一般に用いられるようになる。

⑨“熱鬧”と“鬧熱”について

明清時代と現代漢語の“熱鬧”“鬧熱”の特徴と形成要因:

ⅰ明清時代では“鬧熱”は基本的に形容詞として「にぎやかである」の意味で使われている。“熱鬧”のように動詞として使われるのはあまり見られない。また、「V+“得、的”+“鬧熱”」の構造もあまり見られない。

ⅱ明清時代は“熱鬧”の使用範囲は広いが、現代の“熱鬧”の使用範囲は狭い。一方、明清時代は“鬧熱”の使用範囲は狭いが、現代の“熱鬧”の使用範囲は拡大した。

ⅲ“鬧”の意味は複雑で、多い。特に清代になってから、“鬧”は最も発展した。複音節を形成するとき、“鬧”が作る複合語は、不安定性があるため、“熱鬧”“鬧熱”の逆序語もできた。

ⅳ“熱鬧”“鬧熱”は最初「にぎやかである」、「賑わい」の意味でよく使われていたが、明代以後は「盛り上がる」の意味で使われるようになった。これは“鬧”の意味の拡大と関係があると考えている。

⑩“扎挣”と“挣扎”について

近世語の“扎挣”と“挣扎”の区別と特徴:

ⅰ近世語と現代共通語の“挣扎”は一般に“在困境中奮力支撐以獲得解脱”の意味を持つ。使用場面:困難に向かって思い切って、まっしぐらに進んで行く場面に多く使用される。強調内容:“奮力”の意味が含まれ、困難を乗り越えるために工夫と努力を重ね、目的に到達するまで、決してあきらめない、力の限りに努力する意志が強いことを強調する。しかしながら、近世語の“扎挣”は一般に困難の束縛から脱出するが、否応なしにやらされるため、一生懸命に乗り越える強い意志、積極性な姿勢が感じられないと考えられる。使用場面:“扎挣”は“勉强”の意義が含まれ、本人の意志を無視して強引に何かをさせる場面に多く使用される。強調内容:“扎挣”の動作主は自ら望んですることではなく、無理強いされることを強調する。

ⅱ近世語“扎挣”と“挣扎”のそれぞれ会話文と地の文の使用件数から“挣扎”は基本的に地の文に使用され、書面語的ニュアンスが強い。一方、近世語“扎挣”の口語色は強いと考えられる。

ⅲ近世語“挣扎”と“扎挣”の動作一行為者は人に限られるが、現代共通語“挣扎”は人に限らず、動物でも抽象的名詞でも使用される。

第四章は逆序語現象が生み出される要因を以下の通りに考察した。

要因一:複合語の起源と密接に関わっていること。

要因二:語素の位置を逆転するのが非常に便利で有効な造語法であること。

要因三:複合語の一つの語素の使用が多く、新しい意味が出て、使用範囲も広くなること。

要因四:修辞の要求と方言の影響があること。

第五章は本論文の結語である。